



風の便り(第92号)

発行日:平成 19 年8月

発行者:三浦 清一郎

小学校における実践研究の基本視点

目標と方法の整合性 ～なぜ、なにを目指すのか？～

この度ありがたいことにある小学校の研究プロジェクトに関わり、研究計画の提示を受けました。筆者の視点を整理する意味で目標と方法の整合性を検討してみました。本小論で素材とした学校側の第1次プロジェクトは、その後の「企画委員会」の中で、学校との協議を経てすでに大幅な修正・変更を行っています。当然、これからの実践プロセスも変わります。ここで取り上げた事例は当該学校の「第1次」プロジェクト構想です。筆者の分析は学校に失礼のないよう可能な限り「一般化」に努めたつもりですが、筆が走りすぎている所はご寛容にお許しください。協議を通して先生方の気合いとチームワークが日ごとに充実して来たことを実感しています。再び「霞翠小学校」と過ごした興奮の日々が戻る予感がします。学校との協働作業を経て1年後には、現行教育に何らかの具体的提案が出来れば望外の喜びです。

多くの学校の研究プロジェクトが成果を生み出せない原因は、教育界が多用する抽象的にして曖昧、情緒的にして耳に快いだけの美辞麗句の「形容詞」に原因があることが分かります。以下は筆者の分析の視点と結論の概要です。

- | | |
|--|-----|
| ● 小学校における実践研究の基本視点 | P1 |
| 目標と方法の整合性～なぜ・なにを目指すのか | |
| ● 1年生の熱狂～寺子屋キャンプの子ども達～ | P6 |
| ● 報道の目『井関夏休み子ども元気塾』-山口県生涯学習推進センター「地域寺子屋ゼミナール」の挑戦 | P8 |
| ● Message To and From | P11 |
| ● 編集後記 ～直感勝負～ | P12 |



課題1 課題設定の「曖昧性」―仮説と方法の乖離

1 実践にせよ、研究にせよ「主題」を曖昧・抽象的な形容詞群で表現してはならない

事例の研究主題はすでにプロジェクトの査定を受ける時に申請済みですから、事後の変更は出来ませんでした。研究「主題」は『他者との関わりを自分の高まりに生かすことのできる児童の育成―生き生きと活動できる場作り・集団作りを通して』です。

多くの学校の課題設定の最大の問題点は、主題が曖昧かつ抽象的な形容詞で表現されていることです。目標が曖昧で「大風呂敷」であれば、最大の難点は研究または実践の仮説を具体的な指導法に翻訳することが難しく、検証することも容易ではなくなるからです。

例えば、上記の「他者との関わりを自分の高まりに生かすことのできる児童の育成」という時、「自分の高まり」に「生かす」とは、児童の日常においてどういことを意味しているのでしょうか？換言すれば、「自分の高まりに生かすことのできた児童」とはどんな児童なのでしょう？おそらく、この主題の表現から子どもの日常において「自分の高まり」を具体的に説明することはできないでしょう。

即ち、「自分の高まり」とは具体的に児童がどのように変容することを想定しているのか、「主題」を見るだけでは全く分からないのです。「仮説」と「方法」の乖離とはそういう意味です。

また、当然のことですが、実践と研究を繋げようとすれば、「他者との関わりを自分の高まりに生かすことができた」か「否」か、はどのようにして評価・証明するのか、が問われることになります。

また、上記の主題では、「他者との関わり」とは児

童にどのような人間関係を想定しているのか、も分かりません。

さらに、「主題の意味」の説明文に使われた(子どもが)「新しい自分」(になる)とは何を意味するのか？単に、新しい体験をする、ということか？「できなかったこと」が「できるようになる」ということでしょうか？主題の「抽象性」、「曖昧性」はそのまま説明文の中にまで曖昧さを引きずってしまうことも多いのです。

2 既存の教育目標:「めざす児童像」と「研究主題」の乖離

学校の教育目標:「児童像」は以下の通りです。

- (1) 基礎基本を身に付け、自分から進んで学習する子ども
- (2) 励ましあい、思いやりのある子ども
- (3) 明るく元気でたくましい子ども

ここに掲げられた「めざす児童像」と研究主題に言う「児童像」は当然共通していなければなりません。だとすれば、上記3点の児童像は、「研究主題」のいう「他者との関わりを自分の高まりに生かす」という実践の中身と方法で達成できるのか？それは具体的にどんな内容で、どんな方法か？両者の文言を読む限り論理駁な「関連づけ」は簡単ではないでしょう。

3 目標は具体的な「態度」・「言動」に翻訳されなければなりません

「めざす児童像」の叙述に含まれた「励ましあう

子ども」、「思いやる子ども」、「明るい子ども」、「元気な子ども」、「たくましい子ども」の基準は方向目標であって、まだまだ抽象概念に留まっています。「励ましあう」、「思いやる」、「明るい」、「元気な」、「たくましい」も、これらはすべて情緒的な形容詞に過ぎず、子どもの日常において、具体的に「何が」「どのように」達成できたらこれらの目標が達成できたことになるのか、を実践プロジェクトの中で説明できなければなりません。具体的な「指標」や「態度」や「行動」だけが検証の対象になるからです。学校

教育が多用する「豊かな心を育てる」というたぐいの目標が意味をなさないのは「豊かな心」では検証の方法も、指導の方法も具体的にならないからです。「豊かな心」は子どもの日常に即して彼らの他者をいたわる「態度」や相手を気遣う「言動」に翻訳された時、初めて指導と検証の方法が想定されます。もちろん、それらの「言動」が確認されたとしても、それが「豊かな心」の証明になるか、否かは、また、別の次元の問題です。

課題2 研究プロジェクトを通して導こうとしている児童の行動変容仮説の問題点

研究、実践を続けて行ったら、その成果として何がどのように変わるのか？「成果」を想定し、「そこに至る道筋」を示すことが研究プロジェクトの「仮説」です。学校の企画書には以下の「仮説」が列挙されていました。これらの仮説ではまだ「成果」の具体性がイメージできないでしょう。方法論も想定できません。成果を達成できたか、否かを検証することも困難でしょう。

1 「友達や地域の人々との関わりの中で、新しい見方・考え方を身につける」

(1) 上記「人々との関わり」とは学校が想定する具体的な児童の日常でどのような関わりを意味するのか？

(2) 「新しい見方・考え方」とは具体的に何をさすのか？何がどのように変容したら「新しい見方・考え方」が身に付くことになるのか？

2 (児童が)「自分の考えや思いを理解してもらう」

「児童の思い」とは何か？「児童の思いを理解してもらう」とは「児童」がどうなればいいのか？誰が理解するのか？どのような場面を想定しているのか？仮説が具体性を欠く、とはこうした「問い」に答えられないということです。

3 「他者から認められる体験を豊富に持たせたい」

この時、「認められる」とは、「誰が」、「子どもの何を」、「どのように」認めることを想定しているのか？「豊富に持たせる」とはどのような場面を想定しているのか？体験のプログラムと頻度はどのように考えるのか？具体性とは指導順序や、そこから導きだされる子どもの言動を日常の生活に即して想定できることです。

4 指導仮説と結果を結ぶ「論理性」

上記1～3の活動を通ったとしても、子どもに期待する「心」が育つ必然性はありません。当然、因果関係の証明も論理的な説明も困難です。また、子どもの「自信」や「自己の可能性に対する信頼」や「自尊感情」を育てて行くことは十分可能ですが、指導仮説と児童の行動変容から論理的に説明することが不可欠です。指導仮説が期待された結果につながるよう活動カリキュラムの論理的な「設計」が不可欠である事は言うまでもありません。

5 安易に学力の向上は想定できない

また、上記1～3の活動体験が廻り回って「学力向上」につながるか、否かも論理的な説明なしに期待することは出来ません。色々努力すればきっと「見えない学力」の向上につながり、「見えない学力」が基礎学力を向上させる筈だ、と言うだけではあまりにも教育効果の見方が楽観に過ぎるでしょう。たとえ、現行のテストが批判力や創造力の測定に向いていないとしても、読み書き計算の基礎学力こそは出来る範囲で具体的なテスト結果による証明が不可欠なのです。

課題3 方法論上の研究課題

1 子どもの変容に順序性は想定できない

別の学校の研究発表資料にありましたが、子どもは「理解」し、「実感」し、「実践」するという特定順序の通りに変わるわけではありません。子どもの変容は教師が期待する論理的順序で起こるわけではありません。「豊津寺子屋」のように「実践」が先で、その後に「やり方」を実感を伴って体得し、最後に意味を教えてもらって理解するという場合だってあるのです。

別の中学校の実践研究には、初めに自己を「見つめて」、次に自己を「つかんで」、それ結果として「やり抜く」ことができ、最後に本人の「めざす」目標に至るという「図」が示してありました。しかし、子どもの向上や変容がすべてこの順序で進む保障はありません。初めは人にいわれた通りに始めた事も、ものごとを「やり抜いて」みれば、そこから見えて来るものはたくさんあるのです。学校が現実人生を知らず、

教師が実社会を知らないと言われるのは、机上の上で人生の「理解回路」や「実践回路」をあたかも教科書の「理想型」通りに固定化するからです。

2 「活動」をいうのなら構成要因に分解して、方法を提示しなければなりません

学校の分析では、現状は「縦割り班」活動が“停滞”しがちである、というものでした。「活動」には、かならず構成員、目標、プログラム、方法、頻度、場所・舞台等が関わります。グループ活動であれば分業や役割分担も不可欠です。

役割分担が明確でなければ責任意識も達成感も薄くなるからです。目標を実現する為にはどのような「役割構成」、「責任分担」を想定するのか、は計画の「カギ」になります。

研究計画には実施要項や展開案が必要になるのはその為です。

また、活動の「負荷」が低ければ、協働の意識も、責任の所在も希薄になります。それゆえ、どこまでやるのか、やれるのか、を決定する事は極めて重要です。子どもが楽しく過ごせばいい等というプログラムでは、ほとんど学校の教育力にはなり得ないのです。「解決課題(負荷)」が決まれば、練習のステップとスケジュールが決まるのです。

3 大人との人間関係・現状分析の曖昧性

教育の成果は「やってみなければ分からないこと」が多いのです。言葉使いや礼節の向上が学校の中で確認しにくいのは、机上でやろうとするからです。それは「量の上の水練」に近いでしょう。

現代の子どもは作法と儀礼の「型」を習得していないからこそ「人間関係」のあり方が問われるのです。同じように、「感謝の気持ち」も「歓迎の思い」も忘れたわけではありません。もともと教えられたことがないこ

とが多いのです。だから「ありがとう」の表現にも心がこもらないのです。

それゆえ、修正した研究プロジェクトでは発表会当日の受付、案内、接遇を子ども自身に受け持たせ、参加者に評価をいただくことにしました。

人間関係における態度や行動の評価を「作文」や子どもの「自己評価」に任せてはなりません。子どもの自己評価は大体が自己中心的で、主観的で、甘いのです。教育も、研究も、子どもの「自己評価」に頼ったり、振り回されてはならないのです。

児童が体得すべき人間関係の「基本」は、半人前の子どもに考えさせるのではなく、指導する側がその「意義」を教え、作法の「型」を示し、「手本」を演じ、反復して「反射的にできる」ようになるまでトレーニングをするのです。子どもが礼節の意味を考えるのは礼儀作法が身に付いてからのことでいいのです。

結論： 研究の進め方と指導の方法

教育の3原則は以下の通りです。

「やった事の無い事は出来ない」

「教わった事の無い事は分からない」

「練習しなければ上手にはならない」

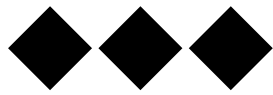
したがって、問われるべきは、子どもは何のために、「なにをやったのか」、「何を教えたのか」、「どの程度練習を積んだのか」の3点です。上記の分析を箇条書きにすれば次のようになります。

(1) 研究も指導も目標が具体的で、子どもの日常に即して検証可能でなければなりません。

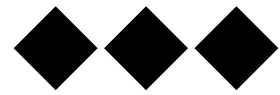
(2) 研究方法も指導方法も、「主題」を逸脱せず、

研究が想定している課題に直結し、目標を実現する仮説が適切であることを論理的に説明ができなければなりません。仮説や想定される条件は主題と方法に密接に関わったものでなければなりません。

(3) 提案された「活動の場」や具体的な「目標」は指導案、展開案の中にスケジュール化しなければ練習にはつながりません。週別、月別、学期別の行事にも、研究計画の「目的(方向目標)」と「達成の度合い(達成目標)」明記した「実施要項」と具体的な進め方と役割分担を共有するための「実施細案」が不可欠です。



1年生の熱狂



—寺子屋キャンプの子ども達—

今年の寺子屋キャンプは、河川プールやキャンプファイアーに加えて、炎暑の中で「けり野球」と「ドッジビー」に興じました。子ども達、中でも新1年生の熱狂は見ものでした。通常の寺子屋の基本訓練を受けていない夏休みにだけ参加した子どもが半数いました。彼らにとっては初めての外泊、恐らくは初めての異年齢集団の中のぶつかり合い、「けり野球」も、「ドッジビー」も2日間に亘る徹底した班別のリーグ戦による勝負のつづしあいでした。試合が進むにつれ、彼らの興奮は極致に達しました。

彼らにとって初めての猛暑の試練は幸運にも熱狂的ゲームに終始しました。それゆえ、今年の酷暑の炎天にも耐えました。私たちは熱中症の危険にハラハラしながらも、“帽子をかぶれ”、“お茶をまめに飲みなさい”、試合のないチームは木陰に入れ！！“等と声を囁らし続けました。

一人の子どもが夕食のカレーライスの食べ過ぎ(?)で食後に戻したので、保護者と相談の結果、

自宅に帰しました。残りの児童は最後までがんばり続けました。上級生の慢性的偽善と違って、1年生はいまだ上手な口はきくことが出来ません。指導者の目を盗んで、楽をしたり、「楽な」作業だけを渡り歩く「要領」も体得していません。上級生の「慢性的偽善」とは、罰せられれば動き、恐い人のいうことだけを聞くという状況です。声の小さい女性の指導者、優しいアプローチをする年配の指導者の指示はあたかも聞こえなかったかのように振る舞います。学級はこのようにして崩壊して行くのだろうと垣間みた感じがします。

これに対して、キャンプ初陣の1年生は、荷物運びも、掃除も、食事の準備も不器用でしたが一生懸命にやりました。彼らの中には「寺子屋4か条の心得」の条項が生きていました。「なにごとにも前向きに力を尽くそう」も、「熱意には熱意をもって尽くし、一生懸命には一生懸命をもって応えよう」も生きていました。なるほど「鉄は熱いうちに鍛えよ」です。

● 欲求の囚人 ●

キャンプで観察した多くの子どもたちは、1年生を除いて、「欲求の囚人」とでも呼ぶべき状況でした。「やりたい」事だけをやりたいと主張し、やりたくない事からは知恵の限りを尽くして逃げ回ります。子どもの主体を過剰に受容し、彼らの興味関心にひたすら

奉仕する事を「愛情」や「教育」と勘違いして来た日本の子育て、日本の教育のつけが出たのだと確信しています。

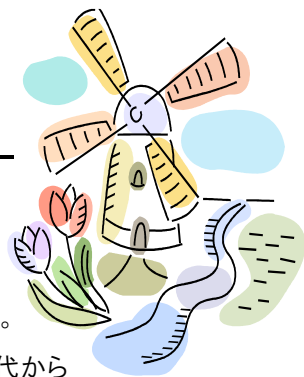
少年犯罪者の多くが自分の欲求を妨害された時に犯行に及んでいるように、彼らを律しているのは

理性ではなく欲求なのでしょう。上級生の多くは自らの好きなことをやっている間だけ、1年生と同じように熱狂し、プレーに興じますが、それ以外の義務的役割を進んで履行することはほとんど全くありませんでした。しかも、楽しいゲームの中でさえも、大人の間隙を見て平然とルール違反を犯します。「勝ちたい」という欲求の前には彼らの理性は崩壊するのです。今年の上級生は下級生に対する「手加減」の余裕も見せませんでした。

「鬼の塾長」が仕事の関係でお留守の間は、筆者が「鬼の顧問」を名乗って、下級生の「負の手本」となりかねない上級生のルール違反者は容赦なくその尻を叩きました。私が行く所、上級生の「ワル」どもは素早く避けて、働いている振りをし、目を伏せます。整列のときも、掃除のときも、ゲームの「ズル」もすべて見つめているとすこしずつ「かげひなた」が消えて行きました。子どもには教えた規範が心身に根を下ろすまで、絶えざる「鬼の監督」が不可欠な

のです。教育界のいう子どもの主体性や自主性に期待して放任する事は教育の放棄に近いのです。子ども性善説に基づく「良心」に期待するだけでは、少なくとも、安全で、楽しいキャンプは出来ないのです。

欲求を野放しにすれば、「いじめ」が根絶できないのも当然なのです。孔子を引用するまでもなく「君子は一人を慎み」ますが、霊長類ヒト科の動物は己の欲求を最優先します。結果的に、子ども集団の秩序は崩壊します。子どもの日常に社会生活の規範の監督者・体现者がいなければ、参加者が役割を分担し、上級生が自分を律して下級生をいたわり、ゲームをフェアプレーで楽しむなど到底無理なのです。彼らは自己中心的な欲求の囚人なのです。日々トレーニングを受けて来た豊津寺子屋の子ども達でさえも、教育公害の到来は不可避である事を予感させるのです。



● 教育の遺産 ●

慢性的偽善に染め上げられ、欲求の囚人となった上級生の子ども達に引き換え、キャンプに参加した豊津のボランティア指導者の働きぶりはまさに獅子奮迅の様相でした。焼けるような炎天下で働いていない人はいませんでした。誰もが次から次へと不満や愚痴を言いつけにくる子どもの世話を喜んで続けました。先輩のみなさんの活力にも、働きぶりにも、戦中または戦後初期の教育の遺産を垣間みた思いです。少なくとも「豊津寺子屋」はこの方々が体得している勤勉と奉仕とチームワークの精神を抜きに

して語る事はできないと実感しました。

すでに小学生の時代から

「欲求で凝り固まった」「慢性的偽善者」をどうしたら先輩指導者のように育てて行くことが出来るのでしょうか？

子ども達には現代の「子ども宿」で親元を離し、体力、耐性、規範の体得を半強制的に教え込む事が大切なのです。

報道の目『井関夏休み子ども元気塾』

—山口県生涯学習推進センター「地域寺子屋ゼミナール」の挑戦

山口県生涯学習推進センターは昨年度から「地域寺子屋ゼミナール」の名称で子育て支援に関する実践を前提とした研修を実施しています。昨年度の成果は長門市で組織化されたものが2つ、周南市で個人的に行われたものが1つでした。今年度の研修と実践は著しい進化を遂げました。現在、下関市、岩国市、八代町、山口市の各地で様々な挑戦が進行しました。表題の「井関子ども元気塾」は山口市阿知須の井関小学校に併設された「学童保育」を舞台としてプログラムを導入しました。

周知の通り国が目指している「放課後子どもプラン」は、文部科学大臣と厚生労働大臣の合意に基づいて、従来の学童保育に教育プログラムをドッキングして、公立小学校を拠点とした「保教育」のシステムを地域に根付かせ、合わせて女性支援・少子化防止を目的とした一大事業です。しかし、現状は福祉関係部局が理解せず、教育委員会の力も及ばず、それぞれの縄張り意識が角付き合っほとんど具体化していません。なかんずく、職を失うことを恐れた学童保育の「指導員」の抵抗が大きく、学童保育にプログラムを入れる単純な工夫ですらもほとんどの地域で実現に至っていないのです。地域が協力して子どもを育てようという複合的な大事業を前

にして地方の行政は子育てに奮闘している多くの家族の要望を無視した誠に不合理、非効率なシステムに墮しているのです。それに気づかない為政者もなんと不勉強で、愚かなことでしょうか。

とりあえず事を荒立てない解決策は、学童保育の「指導員」の現状身分を保障する代わりに、「彼女たち」の研修を充実し、プログラム・コーディネーターとしての機能を充実させ、地域住民のボランティアを組織化してプログラムの指導をお願いすれば、「一石数鳥」の効果を生み出すことは疑いありません。井関小学校学童保育における「元気塾」のパイロット事業は、校長先生がシステムの重要性を理解して学校を開放し、「指導員」がプログラムの意義を理解して協力し、生涯学習推進センターの研修生が日々の指導を加勢し、地域の住民ボランティアも加わった画期的なプログラムを展開しました。1週間という短い期間でしたが、「放課後子どもプラン」の構成原理をほとんど網羅した実践モデルを提示したのです。

関係者の努力もあって地方紙には2度も取り上げていただきました。しかし、記事を読む限り、取材した記者も、編集のデスクも「元気塾」の意義を見抜くことはありませんでした。

● 1 ● なぜ個別プログラムの表題にしか目が行かないのか？

1回目の新聞記事の見出しは「郷土山口かるたでお勉強」でした。2回目の見出しは「山口で親子90人料理教室楽しむ」でした。現代の報道はなぜ個別プログラムの表題にしか目が行かないのでしょうか！？不勉強のそしりは免れません。記事を書いた記者も編集を担当するデスクも、「子育て支援」が「女性支援」と「発達支援」と「高齢者の活力の維持」と「少子化防止」と「学校開放」が同時並行的に達成できる複合的事業であることが分かっていないのです。

「カルタ」も「親子料理」も支援システムを展開する素材に過ぎません。「カルタ」も「料理」も確かにテレビや新聞の「絵」になって、人目を引きませんが、その程度の発想で記事を作ったということでしょうか。メディアの理解力がその程度だから、子育て支援事業や少子化防止策の目的が地方政治家にも、行政関係者にも浸透しないのです。メディアは「社会の木鐸」であるという

看板が泣いていることでしょう。

記事を読む限り「元気塾」が保護者に代わって、地域が「養育」の負担を軽減するシステムの構築実験であることはほとんど全く分かってはいません。結果的に、従来の学童保育には教育的発想に基づくプログラムが存在していないことも分かっていません。もちろん、プログラムを入れたとして現状の利用施設の物理的条件ではその展開が難しいことも分かってはいないのです。それゆえ、学校開放の意義も理解できないのです。

「山口郷土かるた」が重要なものではありません。「親子が料理教室」を楽しんだことが重要なのではないのです。たった1週間とは言え、プログラムのなかった学童保育にプログラムが導入されたことが重要なのです。

● 2 ● 想像力の欠如

教育プログラムを入れたらその目的と成果が問われなければなりません。また、成果を問うためには、プログラムの中身と方法の吟味が必要になります。当然、誰が指導にあたるのか、指導の場所と時間は適切か、も問われなければなりません。

記者も見ての通り、学童保育の場所は20畳ほどのごとのひかれた小さな空間でした。そこに30名近くの異年齢の子どもを収容すれば、身体的な動きを伴うほとんどのプログラムは実行不可能でしょう。したがって、プログラムを実行するためには子どもたちの動きを保障する物理的空間が不可欠なのです。校長先生が学

校施設を開放してくださった意義はこの問題に尽きるのです。

もちろん、「放課後子どもプラン」の提示以来、文部科学省も「拠点」として公立小学校を使用するように唱導しています。これに対して学校関係者が「抵抗」しています。メディアはこうした事実を知らないのでしょうか。当然、関係者の熱心な依頼も、「元気塾」のために学校施設を開放した校長先生の決断も評価視点の外なのでしょう。筆者は校長先生の「度胸」や「思い切り」のよさは「先駆的」とであると解説したのですが、その意味が通じなかったのでしょうか。なぜ、市民の税金で

建てた学校が、当該学校の子どもの放課後や休暇中の活動に使えないのか、学校開放に関する管理職の

意識がどのようなものであるかも事前の勉強が足りないのです。

● 3 ● 子どもの変容の連鎖

プログラムの終了後、井関の「元気塾」を担当した指導員の上野敦子さんから総括のお便りをいただきました。実現にこぎ着けるまでには、色々あったそうです。しかし、「一番変わったのは自分です」という結論が印象的でした。彼女を変えたのは「元気塾」効果であり、子どもの変容の連鎖だったのです。

すでに寺子屋を経験した人々にとっては、子どもの潜在的可能性は分かっていることかも知れません。しかし、今回初めてこの事業に関わった方々は、子どもがわずかに数日のうちに激変して行くことに目を見張ったのです。しかし、期待と予想値の水準は低かったのでしょう。いたいけな1年生が明治時代の表現を多用した「雨にも負けず」を誦んじただけで多くの人々が率直に感動しました。その時、子どもの変容と元気は「プログラム」と「指導」の賜物である事にどれだけの人が気づいたでしょうか？子どもは断じて一人前に「なる」のではありません。多くの関係者の努力が一人前に「する」です。「する」為には、当然、中身と方法が不可欠になります。すなわち、プログラムと日々の指導がカギになるのです。元気塾の指導はボランティアが担いました。

元気塾は指導に関わった地元のみなさんをも元気にしました。交流も進み、仲良しの度合いも増しました。元気のもと「指導」実践です。人々は指導を通して頭を使い、身体を使い、気を使うことによって自らの活力を引き出したのです。

子どもの成果はまず言葉使いに現れたとお便りにありました。敬語はもとより、丁寧語を使うことも稀であった子ども達は「…してください」、「先生、いいです

か？」と言うようになったといいます。単純なことです、プログラムの反復はしつけの出来ていない子どもに“奇跡”を起こしたのです。けんかが少なくなり、仲直りも速くなったそうです。子どもが変わったので自分の仕事がどんなに楽になったかを実感したと上野先生は述懐しています。日々子どもに接している先生でなければ指摘できない変化だったことでしょう。たった1週間のプログラムで学童保育は「学童保教育」に進化したのです。当然、変化の連鎖は異年齢の子ども間の交流に及び、上の子が下の子をいたわるようになり、結果的にケンカが少なくなったのです。子ども集団が上野先生が期待する方向に変わりつつあるということでしょう。それが「仕事楽になった」理由です。保護者の連絡帳のお便りも一気に増え、プログラムについては、“これからも続けて”という声がたくさん出て来たそうです。学校の態度も変わり、今回の夏休みプログラムに限って、特別に使わせてもらった「コミュニティ・ルーム」は今も使わせてもらっている、と便りが弾んでいました。税金で建てた公共施設である学校の遊休施設を同じ学校の子どもが使えないということの方が異常なのです。しかし、現実には、「当たり前であるべきこと」が、学校風土においては決して「当たり前」ではないのです。小さな部屋の学童保育施設に長年閉じ込められて来た上野先生にとっては隣の部屋が使えるだけで実に新しい感動なのです。

親子と一緒に料理を楽しんだとだけ報じた記者の目には、「元気塾」が生み出した真の変化が見えていないのです。



MESSAGE TO AND FROM



お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★福岡県那珂川町 鹿毛 仁 様

ご丁寧なるご報告のお便りありがたく拝読いたしました。学校の現状に対してはいささか乱暴に過ぎる提案であったかと思いますが、みなさまに関心を持っていただき、思いがけず肯定的に受け取っていただき嬉しく存じます。「子ども観」の思い切った転換と保護者に対する教育の姿勢を確固として確立しない限り、教育の混迷は続くと思っております。「子宝」に対する一方的な奉仕と受容は教師を苦しめるに留まらず、いずれ社会の教育公害として溢れ出すことでしょう。

★島根県益田市 大畑信幸 様

今回の御知らせに載せた通り井上教授のご尽力で沖縄移動フォーラムが実現しました。12月には琉球大学で生涯学習“同志会”をやりませんか？大畑去ったあとも、綺羅星7は健在と知りました。しかし、中学校はこれまでとは違うでしょう。幼少年教育とは異なり、自我に目覚め、身体が音立てて変わり始めた思春期の中学生と日々の交流が始まり、進学指導や部活に追われる中学教師となったあなたの“新しい顔”に刮目してお会いしたいものです。

かつて己の意志で役所を逃げ出し、田舎の大学に赴任したあと、省内に残って孤軍奮闘を続けた上司にお会いしたことがありました。あなたのお便りに懐かしい「屈辱」を思い出しました。

あいさつをしに来ただけなのに
ひたすらに友の語れば
立ちのぼる意気に恥じ入って
コーヒーを手にしたまま
喧噪の明るき部屋に

返す言葉もなく

優しく見据えられ

風に散る雲のようであった

やっと手にした自由の季節が

情眠の自由であったとは思わないまでも

引き合わないことを承知のあなたの使命感は

覚悟の光彩を放ち

今は田舎教師と成り果てた

わが安逸の前に

きらめく星のようであったことをなんとかしよう

★ 山口県山口市 重村太次 様

「井関元気塾」を始めあなたが査定された事業はすべて花を付け始めました。県民のお役に立つであろうことも確信しております。どのような発想と視点で財源の配分をするか、ということが如何に大事であるかを痛感させられております。豊津寺子屋の発表会までご視察をいただき有り難うございました。ようやく合併後の支援体勢が整ったか、と安心したこの時期にまたまた機構改革で事務局の担当システムが変わると言う噂が飛び交っています。現場を知らない行政や為政者が机上で事業をいじり回す危険を心配しています。なぜあなたのように現場に足を運びつぶさに実態を見ないのか？疑問と怒りがつのります。山口や長崎等各地からたくさんのお客様がいらっしゃった中で、来賓席に座ったままで、遠来の人々に対しても、ボランティアの指導者に対しても、あいさつも、対話も、ねぎらいもせず、「寺子屋」の意義を最も分かっていないのが地元の為政者ではなかったかと恐れています。



編集後記 ～ 直感勝負 ～



藤沢周平さんの小説を全巻読了し、この1年は宮城谷昌光さんの歴史小説に耽溺しています。耽溺の第1の理由はなによりも全編を貫く日本語の美しさです。言い回しも、響きも、間も、リズムもただただ恐れ入っています。第2の理由は、小説の登場人物の口を借りた、人間観、組織観、政治観等が見事なまでに鋭いのです。同じ本を何回も読み直して常に新鮮なのはよほど自分の読書体質に合っているのでしょう。

名著「管仲」(上)(文春文庫)に「直観は理や知を超えたところで人生の指標として樹つことがある。道を誤るということの一つは自分の直観を疑うことだ」(P.106)という指摘がありました。たった60数年の短い人生ですが胸に沁みるような観察だと思いました。

今自分には早晚自分の人生が終るという直観があります。ものごとを急いでいる

のはこの直観に背中を押されているからでしょう。過日、福島県にお招きをいただき旅の準備をしていたとき、不意打ちで、宗像市から3人の「健康指導員」の女性が玄関に訪ねてきてくれました。久々に受信した健康診断の結果を踏まえて筆者の日常指導に来てくれたのです。話を聞いて助言はすべて「守る」と約束しました。彼女達の熱意の故でしょうか、今まで健康であったように、これからも健康が続くという幻想は捨てなければならないと直観しました。かくして、好物の「甘いもの」を減らし、100パーセントのフルーツジュースを減らし、夜食の楽しみも捨てました。旅の間も意識して助言を守りました。

勤勉をスローガンに掲げ、自分の「直観」を疑わず、己に課した仕事に邁進しようと思います。ようやく猛暑が終り、秋風の気配になりました。みなさまお元気にお過ごしでしょうか？

『編集事務局連絡先』 三浦清一郎 住所 〒811-4177 宗像市桜美台 29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。

『編集事務局連絡先』まで 2007年9月号～12月号をご希望の方:80円

*4ヶ月(残月分)=320円をご郵送下さい。

『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>





移動フォーラムのお知らせ

第80回移動フォーラム in 大山

◆日時：2007.10.7 14:00～

◆場所：大山青年の家(鳥取県西伯郡大山町赤松明間原312-1電話:0859-53-8030)

◆プログラム：

- 1 事例発表 幼少年期の発達課題ミニマム（鳥取県大山町教育委員会）
- 2 事例発表 「熟年者学び塾」のカリキュラムの思想と方法（福岡県飯塚市教育委員会、九州共立大学准教授 永渕美法）
- 3 中央教育審議会「家庭教育」論議の行方（相談中）
- 4 論文発表 幼少年「しつけ」論（仮）（三浦清一郎）
- 5 交流会 大山ペンション『わくわく村、鳥取県西伯郡大山町赤松313-1、
電話:0859-53-8600』

◆連絡先：鳥取県大山町教育委員会幼児教育課

入江雅史(鳥取県西伯郡大山町御来屋 263-1

TEL 0859-54-5219 FAX 54-5217、メールアドレスm-irie@daisen.jp)

◆交通計画（九州から JR で）

博多発(8:49) 米子着(12:59) 米子駅前発(13:00ごろ)で送迎を考えたいと思います。大山青年の家まで、40分弱かかります

第81回移動フォーラム in 沖縄(琉球大学)

◆日時：2007.12.22(1:00pm～)～12.23(9:00am～1:00pm)

◆場所：琉球大学 50周年記念館

◆プログラム：『学びの共同体 (school community)』はいかにして可能か? !」

- 1 日目 学校教育と社会教育の事例発表
- 2 日目 (1) リレースピーチ
(2) シンポジウム：「先駆的」校長サミット

◆読者の宿泊：参加をご予定で、会場の琉球大学に宿泊をご希望の方は至急「風の便り」編集事務局の三浦までお知らせください。

◆沖縄連絡先：琉球大学 井上講四研究室（〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1）
(Tel/Fax:098-895-8430 (E-mail: inoken@edu.u.ryukyu.ac.jp))